―バリ・スト―
反対から賛成まで
一般学生の意見と姿勢

十月一日、後期が始まった。六月のスト突入以来、姿を見せなかった〝一般学生〟は続々とキャンパスに〝復帰〟。この期をのがさず大学側は四日に全学集会を予定し授業再開を訴える方針を出した。さらに体育会もスト解除のための学生大会を開こうと活発に動き始め、目下、局面は流動的に展開中。

そこで本紙では、バリストの行方の鍵を握る一般学生にスポットを当て、その体質と、動向に探りを入れてみた。

以下は、〝意識調査〟に答えた〝一般学生〟の姿である。（西記者）

【本校地区】 去る三〇日の日台下にある書店で経済学書をむさぼり読んでいたC君（政経四）も「前回の学費闘争は問題点がはっきりしていたが今回はその点が曖昧だと思います」と厳しく問題点を指摘したが「四年生でもあり、早く授業をやってほしいんです」と付け加える。

〝就職〟という難題に直面している四年生にとってはまさに〝観念より生活は重い〟ということばがピッタリとあてはまるようだ。

闘争の主体ではないとせよ、この闘争を全面的に支持するという一般学生も多かった。「今までのような授業なら再開されてもどうせろくなのは残ってないよ」と意味ありげな答えをするのは、ストライキ反対派のFさん（法三）。「全共闘が目指している根底にあるものをもっと掘り下げて、ストライキを考えるべきです」と力説する。共産革命を志向する全共闘には同調できないという。全共闘側から言わせると一番地盤の弱いのが本校地区である。今後の動きは注目される。

【和泉地区】 三地区のうち泊り込む学生の数が最も少ない。闘争から〝忘れ去られた〟ような感じのしている和泉キャンパスにも一般学生は続々と復帰。熱心なクラス・サークル討論などが展開され始めた。

クラス討論会などの連絡案内が貼付されている掲示板に目をやっていたG君（法一）は、スト支持派。「ここまで来た以上徹底してやるべきで、何ら改革されないままに正常化しても意味ないと思います」とスジを通す。自らの行動としては「全共闘の言う共産主義なるものの理解が不十分だから、せめて自分なりに勉強して理解することから始めたいんです」と語っていた。

「週に一度は必ず来てボンヤリと同じクラスの人を探しているんです」と淋しそうにポツンとつぶやいていたのはH君（文一）。「ストなんて関係ないんですよ。ひとりでも勉強はできますからね。ただ妙にクラスの友達に会いたくなることがしばしばありましてね」。ホーク・ソングのサークルに在籍中のI さん（文二）も「良く分らないね」とあまり触れたがらない。「いろいろ考えた末、詩をやることにしたの」と目下、詩に専心中という。

法律相談所に所属というJさん（法一）は、当初のスト賛成からスト反対派に転身したという。理由を問うと「ストの目的は大学立法に反対しそのもので、成立してしまった今はバリケード・ストの意味はなくなりました」と答え戦術変更の必要性を主張する。そして「考えが甘過ぎたんです」と、現在のバリストに憂慮、後悔気味。

また「機動隊を入れて早く授業をやってほしい」というKさん（文一）はバリ・スト絶対反対組「クラス討論もろくにしていないのにすぐバリケードなんて許せないわ。第一、どうして大学立法に反対するのか理由がわかりません」。

和泉地区は無関心組が多く、特にわずか二ヶ月（四・五月）しか大学生活を経験していない一年生に、その傾向が強いようだ。

【生田地区】 生田のお山にも一般学生が登場し始めたが他の二地区よりまだ数は少ないようだ。芝生の上で日なたぼっこのL君（農三）は「断固ストを支持します。農学部は特に再闘争がありますからね」と語っていた。農学部の闘争意識は根強いものがあるようだ。

しかし体育会系の学生が多いのも農学部。元体育会というM君（農四）はストライキ絶体反対。「全共闘のいうことはサッパリわかりませんよ。彼らのやっていることといったら学校の施設をただ破壊しているだけじゃないですか」と手厳しい。

無関心組のN君（工二）は「授業がないということは知っていましたが何となく来てみたんです」と語る。大学立法についても「関係ないよ」の唯一言。これから駅前でパチンコをして帰るという。

「授業が始まるまでバイトでもしようかと思ってるんですがね」。

生田地区はバリケードも少なく他地区にあるような種の〝緊迫感〟は感じられなかった。

〝一般学生〟――その示す範疇は余りに広い。関心派、無関心派、ストライキ支持派、反対派、転向派。しかし共通していることは論理がなく、行動しないということである。

目ざめの利害――留年・卒業延期――に惑わされず、つきつけられた問題を自分のものとしてとらえかえす作業が必要なのではないだろうか。